

アジア ヨーロッパという言葉は 何処から出てきたのか？

2015年2月20日
NHKテレビ

古くはアッシリアの碑文にある[asu]〈日の出づるところ〉(東)と[ereb]〈日の没する所〉(西)との対応があって、そのうちの[asu]が転訛して、asiaになったといわれています。これがギリシアに伝わってAsiaとEuropaになったといわれています。

ホメロスのアポロン讃歌(前9世紀)の中で、[Europa]は当時の彼らの世界たるペロポネソス半島及びエーゲ諸島のことをいっていたので、Asiaはそれ以外の東の方を広く指していたと思われる。

参考文献: 平凡社世界大百科事典

紀元前1200年ころに、アルファベットの元となったフェニキア文字が生まれたのもフェニキアのビブロスでした。フェニキア文字は、彼らの地中海貿易を通じてギリシアに伝わり、次第にギリシア文字となり、さらにラテン語でアルファベットになっていきました。

なお、アルファベットとは、ギリシア文字の最初の2文字である α (アルファ)と β (ベータ)からきています。

フェニキア人は紀元前3千年ごろから交易、商業、航海の民として地中海で活躍。ローマに破れて忽然と姿を消しましたが、彼らがつくりだしたアルファベットや造船、航海技術、染色、ガラス加工の技術はその後の歴史を変えました。

フェニキア人の交易の目玉はレバノン杉。古代都市ビブロスの背後に広がるレバノン山脈は杉の名産地で、木材の乏しいエジプトなどへの貴重な輸出品になりました。逆にエジプトの金やパピルスがこの町を経てギリシアへ。「ビブロス」(Byblos)とはギリシア語の「パピルス」のこと。「バイブル」(Bible)の語源にもなりました。

杉はまた船材として使われました。シチリアのマルサラ考古学博物館には、1979年に発見されたフェニキア船の船底の一部が展示されています。けっこう大きなもので40人近い漕ぎ手を乗せました。船底の曲面は当時の技術水準の高さの証。これを駆って、遠くアフリカ大陸を周航し、北米にも達していたのではとする説もあるぐらい。北極星を発見したのも彼らでした。

アジアは古い言葉なので世界の主要言語では同じです。起源は西暦前7-8世紀まで遡ると言われ、当時地中海一帯で活躍していたフェニキア人の言葉だといわれます。

フェニキアは、古代の地中海東岸に位置した歴史的地域名。シリアの一角であり、北は現シリアのタルトゥースのあたりから、南はパレスチナのカルメル山に至る海岸沿いの南北に細長い地域であって、およそ現在のレバノンの領域にあたる。

フェニキア人にとって世界とは地中海周辺だったので、エーゲ海から西をエレブ(ereb)東をアス(assu)と呼んでいました。

後にローマ人がこれを引き継ぎ、ラテン語の地名などに使う接尾辞-iaをつけてasiaが出来上がり、エレブは違った運命をたどって今日のEuropelになりました。

ラテン語の-iaは多くのヨーロッパ語にはいり、新しい地名、物を販売する場所などの名前はギリシア語+iaあるいは自国語+iaで命名され、この習慣は今日までつづいています。

日本人に馴染みのあるものだけでも、ユートピア、オーストラリア、パタゴニア、コロンビア、ボリビア、インドネシア、ルーマニア、キャフェテリア、バージニアなど無数にあります。

参考書

「地名の世界地図」 文芸春秋社 780円